
有料彼氏

真澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有料彼氏

【Nコード】

N1826V

【作者名】

真澄

【あらすじ】

「お金あげるから、わたしの恋人になつてよ」。わたしの彼は、30万円。二人の関係は、1カ月だけのもの。どこまで本当でどこから嘘か、わからないけれど、彼は今日もささやいてくれる。好きだよって。

一話ずつ交互に視点が変わります。

仕事はある。

金もある。

趣味は大してない。

友だちはいる。

恋人は、いない　　きっと、これからも。

欲しいような、いらぬような。面倒くさいような、さみしいような。

最終的にはお金で解決だなあ。会いたいときだけ現れてくれる、都合のいい彼氏。お金払って雇えるもんなら雇うての。

夜中のコンビニのATMでお金を下ろす。銀行に行くヒマもない。そういえば来週は同級生の結婚パーティーがある。少し多めに下ろしておこう。わたし、ちゃんと祝福できるかな。そんなことを考えながらも、帰り道には少し用心する。こんなときに「金を出せ」なんて言われたらこわいよね。けど、ほんとに必要なんだったら支援もやぶさかではないかなあ、なんて。

「おねえさん」

たとえばさ、それが若くてかわいい男子だったらメシのひとつもお

「ごつてやるつというもんだよね。」

「おねえさんてば」

「…わたし？」

コンビニを出て少し歩いたところで、そんな声に呼び止められた。

「そう、おねえさん。悪いんだけどさ、金貸してくんない？」

街灯に浮かぶ顔は、だいぶ年下の男の子。わたしはなんであんな返事をしたんだろう。よっぽど疲れてたんだろうか。今週は毎日残業マックスだったし。

「いいよ、あげる。その代わり私の恋人になってくれない？」

「いいや。理由はあとで考えよう。」

中学時代の仲間と久しぶりに飲んだ。

起業したやつがひとり、大企業でバリバリ働いてるやつがふたり。
いまだにアルバイト待遇の自分の飲み代は、3人がおごってくれた。
うれしくは、ない。

あー金がほしい。

本当に求めるべきものはそこではなくて、仕事、だったり目標、だ
ったりするのだろうけれど。いちばん手っ取り早くてわかりやすい
のが金だったのだ。今の自分に自信をもたせてくれそうなものは。

金もないのに入ったコンビニで、金を下ろしている女性が目に入っ
た。万札を数枚、いとも簡単に手にしている。

理由はわからない。なんとなく後をつけて行って。ああ、酒のせい
かな。なんとなく、声をかけてしまった。

「おねえさん」

返事はない。あれ？ 年上じゃなかったかな。気にするのはそんな

ところではないのだが、酔った頭ではわからない。

「おねえさんてば」

「…わたし？」

ふり返った人は、自分より少しオトナの女性。ほら、やっぱりおねえさんでいいんじゃないか。自分の当て推量が当たったことに満足して、とんでもないことを口にしていた。

「そう、おねえさん。悪いんだけどさ、金貸してくんない？」

「……」

女性に無表情で射すくめられ、頭が冷えた。

やっべ…これ、ケーサツ呼ばれたらアウトじゃね？ 何やってんだ俺。大声を出される前に、酔っ払いの戯れ言のフリをしてとっと逃げよう。

しかし、女性の意外な返事に、体の動きが止まった。

「いいよ、あげる。その代わり私の恋人になってくれない？」

…なんて言った？ やっぱ酔ってんだな、俺。

「いくら必要なの？」

「…何言ってるの」

ああ、この人も酔っ払いか。そう考えれば納得がいく。とたんに気がラクになり、今聞かれたことに答えを返す。

「いくらってそりゃあ、あればあるだけいいしょ」

「なんだ。明確な用途があるわけじゃないのか」

つまらなさそうにつぶやかれ、今夜同級生に言われた言葉を思い出す。お前には明確な将来ビジョンはないのかよ　ねえよ、そんなもん。劣等感と苛立ちがよみがえる。

「まあ、いいわ。じゃあ30万でどう？　1カ月30万」

目の前で指を三本立てている女性は、まるでやおやで大根を値切っているかのような自然な笑顔で。ヘンなのに引っかけちゃったそう思った。

「ホント何言ってるの？」

金持ちの酔狂かよ。しかし当の本人はまじめな顔で、

「少ない？ 私の月給より高いけど……こういうのしたことないから、相場とかわかんないんだよね」

相場なんてあるかっての。アタマおかしいんじゃない？ ああそれとも

「こういうこと？」

「わ、なに」

腕をつかみ、暗がりにつれ込む。公園のフェンスに体を押しつけ、頬に手を添える。至近距離で顔を覗き込み、ささやく。

「要するにこういうこと、したいんだろ？」

「ちち、違う！ ちょっと待って！」

必死に体を押し返してくるので、あっさり離してやる。

「俺のカラダを買いたいってことじゃないの？」

しかしそう問うと、真っ赤になって否定された。

「違う！　そういうんじゃないって……いや、違わない、けど、でも違うってば」

そして俺は二度目のせりふ。

「何言ってるの？」

「えーと、だからあ。そりやいずれはそういうのもナシではないけどさ。そんな、出会ったその日にシたりとか、普通はないでしょう？」

いや、あるでしょう。

「じゃあ30万も払って1カ月も俺に何してほしいの？」

「えー……っとあ……」

別に知りたいわけではなかった。適当にあしらって帰るつもりだったんだけど。予想外の回答に、不意をつかれてしまったのだった。

「わたしを好きになってほしい」

遊び慣れてそうな、イマドキの若い子。だと思った。暗がりに入れ込まれたときには驚いたけれど　この反応にはもっと驚いた。

「わたしを好きになっ　てほしい」

自分でも、何言っ　てんだかと呆れるので、自然と上目遣いになる。愛されるより愛したい。けどやっぱり愛されたい。誰かね、わたしを好いてくれる人がほしいんだよ。そんなつもりで言っ　たら、目の前の彼が動きを止めた。薄暗くてよくわからないけれど、チャラ男のはずのこの人は。

「…照れてる？」

「…ねえよ」

この日のことは、あとからとても叱られた。無防備もいいところだと。けれどなんとなく、この人はいい人なんじゃないかって、思っ　ってしまったのだ。

「で？　どうする？」

「…つまり、1カ月間恋愛ゴッコしてたら30万くれるっ　てわけ？」

「そう、かな？　ゴツゴツていうか…できれば本気がいいけど」

「オツケ、受けるよその話。なんかアンタ面白そうだし」

…本当に乗ってくるとは思わなかった。どうしよう、釣れちゃった。

「えっ。あ、そう、ですか。ハイ…よろしくお願いします…」

「よろしくお願いします」

打って変わって余裕の笑みで返される。攻守逆転。えーと、具体的に何すりゃいいんだろ。お金がからむことだから、とりあえず契約書でも交わしとく？　あ、そうだ。

わたしは慌てて時計を確認する。

「それって明日からでいい？　“今日”ってあと一時間ちよいしかなしい」

そんなことを言ったら、大笑いされてしまった。アンタの金銭感覚どうなってるの？と。ま、たしかにそうだな。見ず知らずの男にポンと30万払うかと思うと、そんな些細な出費を気にするのだから、けどわたしの中ではどちらも違和感はない。

「あーじゃ、お金もつかい下ろしてくるよ」

「最初に払うつもり？ 最後でいいよ。俺がもらい逃げするとか考えないの？」

「…するの？」

そんなこと、考えもしなかった。だってほら、「しないけど…」と、頬をかいてるじゃない。

じゃ、まあとりあえず、と、私たちはケータイの番号とアドレスを交換しあった。

「ふーん。カナさんっていうんだ」

「あなたも…カナタ？」

ケータイの画面には「奏太」の文字。しかし彼は笑って「ソウタだよ」と言った。

明日から1カ月間。ちょうど8月1日から31日までを、私たちは恋人として過ごすことになった。

…てのはいいとして。で、何しよう？ なんにも考えずに始めてしまったのだ。えーと、とりあえず、でえと？ 明日っから？ いや明日は家でダラダラしたいんだけどな。けど毎日なんかしないとお金もつたいないか。ああノープランにも程がある。」

「で、何しようか…？」

提案者のくせにソウタくんにつづてみる。

「ちようどいいや。カナさんさ、今日泊めてくれない？」

…っ

えーっ、いきなり！？

「俺いま住む所なくてさ、友だちんとこ転々としてんだけど。今日行こうと思ってたやつ この近くなんだけど、最近オンナできたんだよね。アポ無しだから、彼女連れ込んでたら困るなあって思ってたんだ」

「はア…そうですか」

「なんなら12時回るまで外で待ってるけど。12時すぎたら泊めてくれてもおかしくないっしょ？ 彼氏なんだから」

「…今日はまだ、手は出さないでよ？」

念を押してみると、両手を挙げられた。

「なんでも言うこと聞きますよ？ お金もらうんだから。カナさん好みの彼氏になるよ」

まあ…いいか。帰るとこなくて困ってんなら。

「そしたら…部屋片づけるから、30分くらい待っててくれる？」

「別に“恋人”なんだから取り繕わなくていいじゃん」

「恋人だから、よく見せたいんじゃない？」

泊めてもらうから、1時間サービス。そう言って彼はさっそく優しい笑顔になった。

「部屋が片づいてなくたって、カナさんへの気持ちは変わらないよ？ むしろ、普段のカナさんの生活を知りたいな」

…っわ…すごい破壊力。これは、なかなか費用対効果の高い恋愛
ができそうだ。

「部屋、散らかってても？」

「うん」

「新聞が散乱してても？」

「へえ、新聞取ってるんだ」

「洗濯物が干しっぱなしでも？」

「うん…」

「洗い物、流しに置きっぱなしでも？」

「……うん」

「たまったゴミが…」

「も、いいから…」

困った顔で止められる。やりすぎたか。けれどその顔がなかなか
わいくて、思わず笑ってしまう。

「恋人でもそうでなくても、とりあえず人様をお招きできるくらいの体裁は整えさせて」

そうお願いして、彼を置いてひと足先に家へ帰った。今週はずっと残業続киだったものだから、家の中はほんとにヤバイ状態だったのだ。

これから彼女の部屋に行つて、「やっぱりお願い」と縋られても別に構わない、と思つていた。というか、結局はそういう目的なんじゃないかと、これまでの経験からそう思つていた。それでもいい。彼女の顔なら余裕で範囲内だ。そうしたら、「一夜のおつきあい」つてことで、いつものようにサッパリ別れればいい。金は別にいらぬ。今夜寝る場所が確保できただけでもラッキーと思おう。

彼女からの連絡を待ちながらコンビニで立ち読みをしていたときは、まだそんなふうに考えていた。ただ 胸がやけにドキドキして、読んでるマンガの内容がちつとも頭に入つてこなかったのは自分でもなぜだかよくわからない。それは、女がシャワーを浴びているのを待つ時間のような“カラダ”のものではなくて。初めてのデートの待ち合わせを待つときのような、じつに純粋なトキメキを、俺は感じていたのだった。

「お待たせ」

「おじゃましマス…へえ、超きれいじゃん」

妙に照れくさいのを抑えながら、もじもじとカナさんの部屋に上がる。1Kの部屋はこざっぱりとしていて、全然散らかつてなんかいなかった。もし彼女がこの部屋のような人柄なんだとしたら、俺けっこう好きかも……なんて考えながら、クローゼットらしきものに手をかける。

「案外こん中につめこんただけだったりして」

「たっ！ちよっ！」

よくわからない擬音を発して慌てて止めにくる。やっぱり面白い、この人。予想外に体が接近してしまい、ドキリとする。定石ならこのあと女のほうから色目を寄越してくるもんだけど。

「あ、座って。そっちどうぞ」

目を合わさず、テーブルの反対側を示されてしまった。けれどその目の泳ぎっぷりに、こちらまで恥ずかしくなってしまう。

ぎこちなく座ると、彼女はぺろんと一枚の紙を取り出した。

「えーと…期限は8月31日…」

手元を覗き込むと、「契約書」と書いてあった。

期限：8月31日23時59分

支払額：¥300,000-

きっちりしてんなあ…。

「ね、俺もし本気になっちゃったら、延長ってあり？」

甘えた感じで問うと、ナシ、と即答された。きっちりしてんなホント。完全に遊びかよ。そう思ったのだけれど、その理由はもう少し違ったもので。

「だってさ、好きになっちゃったら多分、金の続く限り際限なく続けちゃうと思うんだよね。それで最終的に金も男も残ってない、みたいなことになったらもう立ち直れないもん」

「……」

どこまで本気なんだろう。意外な言葉に返事をできずにいると、彼女はこんな提案をした。

「ね、満足度によって5万円の増減ありってのどう？ わたしが内容に満足しなかったらマイナス5万」

「満足させられたら35万円？ いいね、燃える」

そう答えると、「査定あり。増減5万」と楽しそうに書き足す。そうか。楽しめばいいのか。この人のペースに巻き込まれるのは悪くなさそうだ。

「カナさんさ」

「ん？」

「手え出すとか出さないとかの話」

ピタリと彼女の動きが止まる。

「俺、カナさんが望んでくれるまで我慢するつもりだけどさ。口では嫌がつてるのにほんとは欲しがってるみたいなの、読み取れないから。そのときはちゃんと教えてくれる？」

「う、うん…何がしかのサインは出すようにするよ」

「楽しみにしてる」

あ ヤバイ。その照れたようなハニカミかた、ツボかも。ちょっともう一回確かめさせてくんねっかな。時計をちらりと見る。よし、12時回った。今からこの子は俺の彼女。いろいろ囁いて、今のそのはにかんだ顔をもっと見せてもらおう。

ちらりと時計を見た。ああ、12時回ったのか。ソウタくんの態度がなんだかグツと甘くなっている。切り替えの早い子だなあ。普段の生活を聞くと、彼のバイトは基本的に17時から22時。休みは不定。たまに昼シフトになるときもあるらしい。

「じゃあ会えるのは土日の昼間だね。平日はわたしも帰り遅いし」

「週末しかカナさんに会えないの？ 1カ月しかないのに。ここに住むのダメ？」

「…金曜の夜に来てよ」

ソウタくんは「ちえ」と言っていたけれど。そこは、ね。一人の暮らしも守りたいというか…彼の存在は非日常にしておきたいんだよね。あとで“ひとり”に戻ったときにすぐ順応できるように。

「明日は？ バイト？」

「うん。今日が休みだったから、しばらく連勤…あのさ」

「うん？」

「明日、バイト終わったらさ、ここに帰ってきてもいい？」

「……」

「今日会ったばっかなのにおかしいけど。俺、できるだけカナさんと一緒にいたい」

ソウタくんのその言葉は、素直にうれしかった。さすが30万円の威力は大きいね。正面から気持ちをぶつけられて、はにかんでしまう。あの人はこういうこと、言ってくれなかった。あの人は

「カナさん？」

ハッと我に返る。

「うん。明日も来て。わたしもうれしい」

今度はムリヤリ作った笑みだったけれど、ソウタくんは喜んでくれた。

そして、彼には悪いけれど床で寝てもらう。スペースがないので、わたしの寝るベッドのすぐ下だ。

「ゆか固いでしょう？　なんか申し訳ないな」

「いつかはそっちに上げてくれんでしょ？」

「さあそれはどうでしょう」

ニヤリとしてやったら、ほんと想定外！と笑われた。そこ、はにかむトコじゃないの？と。

悪いけど。キミみたいな若造に読まれるほどわかりやすい性格だったら、もう少し人生は泳ぎやすかったはず。

「あー面白え。俺本気でカナさん好きになりそう」

「ソウタくん、バイト接客業でしょう」

「なんで？」

「すごいサービス精神」

マジで言ってるのになー、なんていうつぶやきは聞き流す。それぞれの床につき、電気を消した。この部屋で誰かの息づかいを聞くのは久しぶりだ。あの人が、来なくなってからだ。ダメだ。思考が、あの人から逃れられない。

「カナさん、まだ起きてる？」

「…うん」

「俺わかんないんだけどさ」

「なに？」

「カナさんぐらいの人なら普通に彼氏できるっしょ。なんで金なんか払ってんの？」

「……いつフラれるかわかんないのって、もう怖いんだよね…。期限決めてればさ、あらかじめわかってるからあんまり傷つかないで済むし。別れるのもお金のせいだから、自分が嫌われたせいじゃないって、あんまり傷つかないで済むでしょ？」

本音を吐いてしまった。裏返せばそれは、想像もしていなかった突如の別れに、傷ついたことがあるってこと。たぶん、ソウタくんもそれに気づいただろう。

「……. どんだけ不幸な恋愛してきたの？」

ほっといてくれ。

けれど勢いに乗って、さらにバラしてしまった。まだ浅い関係だったから、却って話しやすかったのかもしれない。

「わたしさ、自信がないの。いつも、嫌われるのが怖くてびくびくしてた。だからワガママとか上手に言えなかった。それが、お前の気持ちには壁があるって言われて」

「……」

いけない。これじゃ完全に体験談だ。でも止まらない。

「だから余計に怖くなって。もう距離の取り方がわからないから、彼氏とか、きつと作れない。でも、誰かにわたしを求めてほしい。必要としてほしいの。これは契約だから、さ。1カ月間は絶対に嫌われないでしょう？ だから怖くないし。ワガママも、きつとうまくなれる」

ああ…言っちゃった。普通は引くわな、これ。

「…もっかい同じこと聞いていい？」

「やだ」

「どんだけ不幸な恋愛してきたの」

だからやだって言ったじゃん！

「にしても、相手が俺でよかったよ」

「なんで？」

あのねえ、と、少し怒ったような声。

「俺じゃなかったら、今ごろとくにヤラれてたよ。そんで金取られて終わり」

「そっか…そうだね」

「それだけで済んだらラッキー。画像でも録られてゆすられてたかもしれないし、ひどけりゃAVの撮影されたりとかもあるんだよ？」

そ、そんな世界があるのか。

「たしかに軽率だったね…反省します」

「もう、これからは俺が、撃退してやるから。そういう悪い輩とか、カナさんの自信の無さとか。……昔のカレの、思い出とか」

……っ。

ここで泣いたら、面倒くさい女だと思われる。とっさにこらえてし

まったのは、わたしの悪いクセだ。自分で言ったんじゃん、期限内は絶対嫌われないって。お金払うんだもん、大丈夫だよ。思ったこと、言おう？

「……うれしい」

返事はなかった。少し、間が空いてしまっていたし。もう眠ってしまったのかもしれない。けれどきつと、聞いていてくれたんじゃないかと思う。さっき会ったばかりなのに、わたしは彼をきつとそういう人だと思った。

その言葉が嘘でも本当でも　ううん。1カ月の間は、ぜんぶ“本当”だ。彼の言葉は、わたしのまだ乾かない傷を、優しくなでくれた。

こんなに走ったのは久しぶりだ。バイトが終わるや、俺は駅へ猛ダッシュしていた。少しでも早く、彼女に会いたかった。先週の土曜日の0時ちょうどに俺の恋人になったばかりの彼女に、一週間ぶりに会いに行く。

あの日の翌朝は、俺の存在をすっかり忘れた彼女に腕を踏まれて目が覚めた。

「ごめん！　そういえばいたんだった」

「…ひどくね？」

ごめんごめん、と腕をさすってくれる彼女に、「昨日の話、なかったことにされちゃう？」と聞いたら、「したくない」と即答してくれた。

わたし、慣れたら早い。そんなことを言っつて、もうずっと前からあの部屋に俺がいたかのように自然に　要するに俺の存在をまったく気にかけず、カナさんはさっさと掃除やら洗濯やらを始めた。こっちのほうが悪く居心地が悪い。

「なー、俺もなんか手伝えることない？」

女の家で家事の手伝いを申し出るのなんて、初めてだ。見抜かれていたのかもしれない。カナさんは驚いた様子だった。

「じゃあ…お皿、洗ってもらおうかな」

「了解」

二人分の朝食だから、大した量はない。それでもカナさんは、俺の手元を覗き込んで感心してくれた。

「手際いいねえ」

「バイト、カフェバーでさ。基本的にホールなんだけど、たまにキッチンも手伝うから」

「へえ。長いの？」

「学生人ときからだから、もう5年くらいかな」

「ふーん…」

あ。就職せずにいつまでバイトなんだって思われたかな。けれど力

ナさんは「頼もしいね」と、背中をポンと叩いてくれた。よかった。点数稼げたか。

……って。何の？

ああ、ほら、5万円アップさせるための点数だろ。そうだそうだ。金もらうんだしね、やるからにはしっかり満足させないとさ。そんなふうに、自分の立ち位置を小まめに確認し直さなければ、うっかり境界線を見失ってしまいそうだった。

そしてその境界線を放棄したのは、その日の夜だ。つまり、彼女と過ごすふた晩め。カナさんはバイト先から向かった俺を、「おかえり」と迎えてくれた。

「ソウタくんさ、お金の使い道って決まった？」

「…なんかあったほうがいいの？」

寝る支度をしながら、そんなことを聞かれた。説教でもされるのかと一瞬身構えたが、ほんとに彼女の答えはいつも想定の外で。

「男に金を貢ぐと、男をダメにするってイッコーさんが言ってたからさあ。“遊ぶ金欲しさ”とかだったらソウタくんのためによくなかったかなって思ってた」

電気消すね、と言って、さらに続ける。

「でも、何か使い道とか必要のあるお金だったら、投資っていうかさ。支援してるみたいな気分になれて、まあ要するに自己満足？」

そんなふうには、自分のずるさをさらりと言える強さを、マネしてみたくなる。

「病気の妹の治療費」

「……」

「て、いうのだったら満足させられる？」

わざとそんな言い方をしてみせた。

「医療費だったら、月の支払い額の上限があるでしょう？」

ほらまた、予想外の答えを返すから。明かすつもりはなかったことをしゃべらされる。

「…高額療養費制度のこと？ 上限を超えたら補助はされるけどさ、8万は払わなきゃいけないから、それが毎月続けばやっぱりキツイよ」

「そっか…」

「……」

「ていうか、ホントだったんだ」

「カナさんこそ詳しいじゃん」

「仕事、医療関係」

「そうだったんだ…こんな話、他人にしたの初めてだ」

この、お互いの顔が見えない位置関係。暗闇の中、横並びで天井を見つめているこの空間が、するすると言葉を引き出す。

「そしたら、わたしに割く時間なくない？ 付き添いとかあるなら無理しないで」

「いいんだ。もう、必要ないから」

だから普通なら絶対に言わないようなことを、話してしまう。そういえばカナさんも昨日、失恋の話を突然始めていたな。何を俺たちはぺらぺらと。

「…必要ないって…？」

「治療の甲斐あつて、無事退院。それを機に母親が再婚してね、再婚相手の家に一緒に帰ってつたよ」

「そう。よかった…ソウタくんは？」

「25歳で新しい父親と同居つてのもね。距離があるほうがうまくやれるよ」

「それで、友だちんちを転々としてるの？」

「家、探さなきゃって思ったんだけどさ」

「うん」

「仕事も、探さなきゃって思ったんだけどさ」

「うん…」

ここから先は、言えばきつとダメなヤツだと思われてしまうことがわかりきっていた。けれど止まらなかった。

「…うち、母さんが看護師でさ。仕事休めないから、俺が妹の面倒みるつつつて。妹10コ下なんだけど、日中1人で置いとくのは心配でさ。だから時間に自由のきくバイトの身分でいようつつつて」

ああ…最低だ、俺。

「……そういう理由つけて、就職から逃げたんだ」

「……」

「そしたら大義名分が退院しちゃったからさ、困ってんの。家探し
たり仕事見つけたりしなきゃなんなくなっさ」

「うん…」

「なのに、全然からだが動かなくなっさ」

「うん」

「俺いまどこに向かってんのかさ、そもそもどこにいるのかさ、ふ
わふわして、わかんなくて」

やべえ…俺何言っただろう。そしてなぜ声が揺れてんだろう。

「燃え尽き、だね」

「…なに？」

ちょっと違いかもだけど、と言って彼女はこんなたとえ話を始めた。

部活の大会前って毎日練習があって忙しかったのに、テスト勉強ちゃんとして、点数も取れていたけど。大会終わって引退したとたん、気が抜けちゃって、時間はたくさんあったのに、テスト散々だったんだよね。

「んー…だからつまり、ソウタくんを支えてた紐がぶつつり切れちゃって、自分で立つための重心を取り戻すのに時間がかかってるんだね」

「支えて…あいつ支えてたの俺のほうだったの…」

“妹を支えなきゃ”っていう思いに支えられてた、でしょ？」

「……」

「休んでいいと思うよ。ほんとにヤバイと思ったら嫌でも浮上するもん」

「そうかな…」

「そうだよ」

いつまでも就職をしない俺を、事情を知らない友だちは「ラクでいいよな」と揶揄する。事情を知ってる母親は、「いつまで甘えてるの」と叱咤する。元気になった妹は、「あたしのせいみたいでやなんだけど！」と生意気なことを言う。そしてカナさんは、そのどれとも違う反応を俺にくれた。

「……いっぱい、がんばったんだね」

「……！」

「きつとずっと、ソウタくんはがんばってきたんだね」

……ああ、もう、境界線なんかいらぬい。金のためとか本気とか、
どっちでもいい。彼女を笑顔にできるなら、それでいい。

「カナさん」

「ん？」

「好きだよ」

「…ありがとう」

今からは、俺が言うことぜんぶ“本気”だつて言つたら、引く？

「ソウタくん、サービスいいね」

それはあなたには伝わらない“本気”だけれど。

ドアを開けたら、汗だくのソウタくんが息を切らせていた。

「いらっしやい。どうしたのその汗」

「早くカナさんに会いたくて、超走ってきた」

まあこの子ったら…。破壊力が一週間でパワーアップしている。

「つーか、カナさんひどい」

「？ 何かした？」

「先週は“おかえり”だったのに、今日は“いらっしやい”？」

そっだったっけ？ 首をひねりながら部屋へ戻ると、「つれねー」と言いながら彼がついてくる。Tシャツの胸元をバサバサ扇ぎながら。

「シャワー浴びる？」

「えっ…！」

バサバサの音が止まった。ふり返ると、真っ赤な顔に半笑いを浮かべている。目がマジだ。

「違う！ そうじゃない！」

即座に牽制を加えながら、バスタオルを渡してやる。それと……ちょっと、引かれるかもだけど、これ。

「サイズ合わなかったらごめん。部屋着あるといいかなと思って」

そう。ついつつかり、彼用のＴシャツと短パンを買ってしまったのだ。

「これ、俺用？」

「ひ、引いた？」

「俺のために用意してくれたんだよね？ 元カレのお古とかじゃないか」

いやさすがにそれは！ つーか、

「引かれるのが怖くて前はこんなことできなかったよ」

「へー俺だけ、かあ…やべ。シャワーよりよっぽど照れる」

やべーやべーと言いながら、ソウタくんは風呂場に入って行く。若い子の「やべー」はいい意味なんだか悪い意味なんだかよくわからない。けど。

そっか。ああいうことしても嫌がられはしないのか。ひとつ覚えた。

一週間会わなかった間、ソウタくんは毎日メールをくれた。私は、朝の通勤電車と、帰りの電車、そして夜寝る前に返信をする。日に日に甘さを増していく彼からの文面に、ニヤけながら、はにかみながら。

いい買い物したな。

まだそんなふうに彼を見ていた。

汗を流したソウタくんは、かわりに色気をまとって戻ってきた。ガシガシと髪を拭くその姿、いいねえ。目の保養だ。

「なに？」

「見とれた。かつこよくて」

「…マジヤバいからやめて」

その“ヤバい”はどっちだろう。まあいいや。

「カナさん、明日はずっと一緒にいられる？」

「あー…昼までだなあ。夕方から友だちの結婚パーティーがあつてさ、美容院予約してるから」

そっか。とあんまりさみしそうにつぶやくものだから。思わず手を伸ばしてしまった。会いたいと言われて断るなんて、いつものわたしなら考えられない。そんなの怖くてできない。彼の腕に手をかけて、言い足した。

「あの、けど、夜はまた泊まりに来てくれる？」

「……カナさんそれサイン？」

「何の？」

「これぐらいならしてもいい？」

……あつ。

抵抗はしなかった。わたしも期待していたのかもしれない。彼に、ふんわりと抱きしめられる。

これは、ヤバイ、ね。

でもいつか。そのままおでこを預けると、背中に回った腕がギュッとしまった。どうしよう。どうしよう。わたしは彼のTシャツの胸元をくしゃりと掴む。

「…それも、サイン？」

えーっと…違うような、違わないような。けど、

「まだ、もうちょっと待って」

「うん。待ってる」

「でも」

「ん？」

「もう少し、こうしててくれる？」

喜んで。そんな優しい声が聞こえて、わたしはそつと目を閉じた。
なんのことはない。ただ、人肌が恋しかったただけだ。

ただだ、と思う。けど。

相手を憎からず思っているのだから、説明できなかった。この
ドキドキと、不思議なほどの安心感は。

破壊力は抜群だった。

シャワー浴びてきて

あなたの着替え、買っちゃったの。だって、これからずっと、会いに来てくれるんでしょう？

明日の夜も一緒にいたいの

こうやってギュッとしてて、お願い。

彼女の言葉が脳内で変換され、さらに威力を増す。腕の中に抱きしめた細い体。その先に進みなくなるのを全力でがまんする。

会えない間のメールのやりとりで、「好きだ」「会いたい」と何度もさやいたのが効いたのか。彼女も「契約」を越えた気持ちを持ち始めてくれたんじゃないかと、勝手な期待をしてしまう。

俺の勇み足は、カナさんのストッパーを外したらしい。カナさんのほうからくつついてくるようになった。それまでテーブルを挟んで向かいに座っていたのが、ピタリと横にくつつく。ちょ、体育座りとかヤメてください。威力ありすぎ。

「ほんとだね、何にもシないでただくっついてるだけ、っていうのがしてみたかったの」

その過去形は、俺との経験談ではなく。

「前の彼とは、できなかったんだ？」

「…あの人は、うちに来るときはそういう目的だったから。近寄れば即始まっちゃったし」

「何が」の部分と言えないカナさんの恥じらいをかわいいと思う一方で、そんなカナさんを抱くただけに部屋を訪れたという元カレに、違和感を覚える。

「わたしからくっつきに行くとかできなかったな…拒否されるのがイヤで、いつも向こうが求めてくれるのを待ってた」

それって、カナさんの自信の無さっていうか…そんなふうに思わせる彼氏のほうにも問題ねえ？ 遠慮しすぎだろ。いったいどんな不幸な恋愛してたんだか。

「あ、ごめん。こんな話」

「その人は知らなかったんだな」

「…何を？」

「ほんとに好きだったら、エッチ無しでもこうやってくっついてるだけで幸せってこと」

言外に含んだふたつの意味。

「俺も今日知ったけど」

「……」

きつとカナさんも気づいたから、返事が無くなる。

元カレはカナさんのこと、“ほんとに好き”じゃなかった。
俺はカナさんを“ほんとに好き”。

今、彼女をうつむかせているのは、どちらの意味を気にかけての
となのか。少しでも後者が含まれていたらいいのに。

「ね、カナさんさ、夏休みいつ？」

空気を切り替えるように、話題を変えた。

「夏休み？ ああ…そういうばまだ申請してなかったな」

「8月中に取れる？」

「んー…お盆に合わせるのがいちばん休みやすいかなあ…暑いし混んでるし、ほんとそこ避けたいけど」

「予定まだ決まっていなかったらさ、俺も休み合わせるから。どうか旅行しねえ？」

そう言うのと、カナさんはまんまるな目をさらにまんまるに見開いた。

「それって…オプション？」

またそんなことを！

「契約内。追加料金なんて取らないから安心してよ」

「旅行かあ…ソウタくん、運転できる？」

「免許持ってるよ」

カナさんの顔がパーッと輝く。

「ドライブしたい！……って、お盆にドライブとか、死に行くよ
うなもんか」

「俺、カナさんだったら渋滞大歓迎」

「どうして？」

「だって渋滞中って、狭い密室にカナさんと2人つきりでしょ」

出た。カナさんのハニカミいただき。じゃあ行きたいところ考えるね、
と言って、うれしそうに笑う。と、それがいたずらっ子みたいな“
ニヤリ”に変わった。

「カップルが一線を越える定番って、“旅行”だよな」

「へえ、そうなんだ。俺、一線越えてからカップルになるしかした
ことないから」

ギロリとにらむカナさんもかわいい。

「妬いた？」

「妬いてないよ。引いただけ」

「カナさんだけだなー。カラダ目的じゃなく一緒にいたいので」

「そうだね、お金目的だもんね」

カナさんの声がだんだん固くなる。内心しくつたと焦りながら、賭けに出してみた。

「やっぱ妬いてんだ」

「……」

ビンゴ。低い声で、「うん」と聞こえた。ヤバイ。ヤバイよカナさん！

「じゃあ、その旅行で、一線越えちゃう？」

けれどそう言った俺に、カナさんはニヤリと笑って「さあそれはどうでしょう」と楽しげに応えた。

本当はカラダなんてどっちでもいいんだ。いや、うそ。そりゃあ心身ともにもっとカナさんに近づきたいのが本音だけど。カナさんが望むまでは待つつもりだ。人の体温が恋しいくせに臆病になってい

るカナさんを、俺が安心させてあげたい。

……にしても。カナさんをそんなふうにした元カレってヤロー、いったい何をしたんだか。よっぽどヒドいことしたんじゃないの？
目の前に現れたらぶつつぶしてやりてえ。

その機会がすぐそこで待つてることを知るはずもなく。俺の思考を遮ったのは、本日いちばんの破壊力を持ったこんな誘い。

「…今日は、こっちで寝ない？」

「え……？」

「やっぱり、ゆかで寝かせるのって悪いし……」

「カナさんのベッドで、一緒につてこと？」

彼女は不安げな表情で目を泳がせている。嫌がられたらどうしよう、なんて考えているのだろうけど。とんでもない！俺はブンブンと勢いよく頷いた。

電気を消して、ベッドに上がる。カナさんの寝間着はTシャツに短パン。白い太ももを見たいけど見れない。いろんな意味で。

「ごめんね、ソウタくん。わたしワガママ言っ

た?」

むしろもっとワガママになってほしいとさえ思っているというのに。

「だって…一緒に寝たいとか、でもその先は待ってとか…男の人に
はづらいでしょう?」

それは、まあ、今夜は眠れない自信はありますが。

「いいよ、こうしてそばにいられば。それに俺、カナさんが主張
してくれるの、すげえうれしい」

そう。元カレには言えなかったワガママを、俺には言ってくれる。
だって30万も払うんだもん。カナさんはそう言うだろうか。

「もう一個、ワガママ言っ

喜んで

「…くっついて寝ていい?」

もぞもぞと身じろぎ、俺の体側にぴったりとくっつく。ああ、だから太もが。

暑いね、と笑いながら、カナさんが俺の胸におでこを乗せる。いやもうマジハンパないっす。

「カナさん、俺…カラダが変なことになったらごめん」

すでに自覚はありますが。

「そしたら、わたしが責任を持って、イタッ」

俺のデコピンをまともにくらい、カナさんがおでこを押さえる。責任持って、どうするって？ 手をわきわきさせるんじゃない！

「すみません、調子にのりました」

「気をつけなさいよ？ほんとシャレになんないから」

しばらくすると、カナさんは寝息を立て始めた。へえ…俺の胸で寝られるんだなあ。悶々と眠れずにいた俺も、その波が去ると、腕の中に彼女がいること、彼女が自分を信じていることにしみじみと満

ち足りた気持ちになり 自分でも意外なほど、心が落ち着いて。
彼女を追いかけるように、眠りに落ちたのだった。

「カナ！ 久しぶり」

「いやーんユウコ！ 幹事おつかれ。ね、今日って結構来るの？」

大学時代のサークルの友人ミキと、田中先輩との結婚を祝うため、サークルの仲間たちで開いたパーティーだ。そんなもん、お祝いを名目にした大同窓会である。

「すごいよ。上下3代ほぼ勢揃い」

「すごい… やっぱあの2人の結婚はみんな待ってたからねー。春長すぎるっつうの」

「いやあ、みんなそれを肴に飲みたいだけでしょ。久しぶりに集まれる口実を提供してくれたことには感謝だけど」

あはは、と笑い合う。いいね、学生時代のこの感じ。

「ね、乾杯の前にウェルカムドリンク用意してるから。飲んでなよ」

受付を確認する幹事のユウコに手を振って、店の中へ入る。きゃー！ 久しぶりー！ ちょっとアンタおじさん化しすぎじゃない？

などなど挨拶を交わしながら、カウンターにたどり着いた。

「お飲み物何になさいますか？」

「んー…ノンアルコールは」

どれですか。と言おうとして、店員さんの顔を見上げるや。ぽかん、としてしまった。

「ソ、」

ソウタくん！！ ソウタくんがグラスを持って立っている。パクパクするわたしに対してソウタくんは、一瞬驚いたような顔は見せたものの、すぐに目線だけで周囲を確認し、わたしへは何も言わずただニツコリとだけしてくれた。

そうか。わたしも慌てて周囲へ視線を巡らせる。わたしとソウタくんが知り合いだということは、別に隠すことではないにしても説明のできない仲ではある。1カ月だけの期間限定彼氏です。30万円（税込）です。てへ。なんて言おうものならユウコから絞められる。

「あー…ドリンクの前に化粧室、使いたいですけど」

「ご案内します」

トイレへ向かう通路、人がいないことを確認してから、ソウタくんと呼んだ。

「バイト先、ここだったんだ。すごいびっくりした」

「俺も。超偶然。：大学時代のお仲間さんたち、だっけ？ 幹事さんが、今日は結婚パーティーのふりした同窓会です、なんて言ってたけど」

「あはは、そうそう。これだけ集まれるなんてめったにないし」

「そっか。楽しんでね。おもてなしはまかせてよ」

店へ戻って行く彼を見送ってトイレに入ろうとすると、ああそうだ、と呼び止められた。

「カナさん、今日マジきれい。惚れ直す」

「いやなに。ソウタくんのギャルソンコスプレのほうがずっとソノりますよ」

ニヤリとしてやったら、コスプレじゃねーし、と笑いながら戻って行った。でもね、ほんと。白いシャツの腕をまくって、腰から下には黒く長いエプロン。マジかけえっす！

よかった。少し、力がわいたよ。じつは今日、わたしはとても緊張していたのだ。仲間たちに会えるのはすごく楽しみだったんだけど、そこに一点黒いシミがあつて。

みんな集まる。ほぼ勢揃い。てことは、そう、きっと

「原田？」

あの人も、来る。

「原田、久しぶり」

笑みを張り付けてから、ゆっくりと振り返った。

「村上くん……」

「元気だった？」

あなたのおかげでボロボロでした。

「うん、まあ」

「よかった、会話してもらえて。俺、原田と気まずくなるのやだったからさ」

どの口が言うわけ？　ほんと、ムダな時間を過ごしたわ。10年以上もあなたを好きだったこと、人生最大の汚点。

「また、さ。メシとか行こうよ」

「…うん」

情けないことに。用意してきた言葉はひとつも喉から出てこない。もう、普通に笑えると思ってた。あなたのことなんて、何とも思っ
てませんよって顔で。それが、もしかしたら、無表情で無視するぐ
らいできてしまうかもしれないと思ってた。のに。……ダメだ。顔
を見たら、もう。

あんまり長い間好きでいすぎたから、そういう体になってしまった
んだ。村上くんを見ると体温が上がる体に。心拍数が上がる体に。
わたし、まだ、この人が好きなんだ。

「俺たち、前みたいな友だち同士に戻れるよな？」

なんで、喜んでんの？わたし。

「うん…」

「…今日はこのあと、田口とかと約束してんの？」

「ユウコ？ まだ、決めてないけど、たぶんお茶でも飲んで帰るんじゃないかな」

「予定、ないならさ。このあと2人で飲み直さない？」

「えっ…」

いけない。流されちゃいけない。けど、もしかして。もう一度

「カナさん」

突然、耳元で声がして、肩をすくめる。

「ソウタくん……」

パーティー用のドレスとメイクで超絶キレイなカナさんと別れ、仕事に戻る。スッピンにメガネもかわいいけど、あんなふうにもなれるんだ。知らずににやける俺の耳に、飛び込んできたセリフ。

「ねえ、カナに会った？」

視線を上げると、女性が2人で周囲をはばかりに話していた。1人は幹事の女性だ。グラスを下げるふりをして、聞き耳を立ててしまう。

「会った。…どう思う？ ふっ切れたと思う？」

「まだ引きずってんじゃないかなあ」

「だよね…今日あいつ来るんでしょ？」

「新郎と仲良いからね。ほんと、カナと会わせたくない」

まさか、元カレ？

「会ったらまた、やっぱり好きとか言いそうだよね、カナ」

「あの男もさあ、俺たち友だちだから、とか言ってフツーに話しかけるんだよね。ほんとムカつく」

やっぱり。どの男だろう。カナさんをあんなに臆病にさせたのは。

「カナもいい加減、やめりやいいのに」

「あーもう、誰かさ、嘘でもいいからカナの彼氏のフリさせようよ。あいつがもうカナにちょっかい出せないように」

「ええ？　だって今日いるの全員知り合いだよ？　それに、カナとあいつのいきさつだってバラせないじゃん」

なんだかわからないけど。元カレを阻止しようということなら大賛成だ。俺は迷わず声をかけた。

「よろしければ、私がしましょうか？　その役」

〓 〓 〓 〓 〓

意気揚々と店を横切り、カナさんの元へ行く。女友達の公認ほど心強いものはない。教えられた相手の男は、ちょうどカナさんに声をかけているところだった。後ろから近づいたので、カナさんの表情はわからない。

「カナさん」

振り向いたカナさんは、驚いた顔。ソウタくん、とつばやくと、元カレの顔をうかがうように目を泳がせはじめる。

「さっき言い忘れたことがあったからさ。…失礼します」

元カレに会釈をし、カナさんの耳元に口を寄せる。もちろん、相手の男にも聞こえるように。

「このあと二次会とか行くなら、連絡ちょうだい。俺、先に家に帰ってるから」

「えっ、あっ」

カナさんが困っている。

「ああ、原田、彼氏できたんだ」

「えっ」

「ちょっと、残念かな。なんてね」

「あ…」

あっさりと友人の輪に戻っていく男性を、何も言えずに見送るカナさん。

「どうして…」

「どうして？」

俺のほうが見きたいよ。どうして、「どうして」なんて聞くの？
どうして、そんなに切なそうな顔をするの？

「カナ、ミキと写真撮ろう」

打ち合わせ通り、カナさんの女友達がカナさんを連れて行く。カナさんはぎこちない笑みでそれに応え、俺には何も言わずに背中を向けた。

幹事の女性、ユウコさんのところへ戻ると、「グッジョブ！」と出迎えられた。

「あれでよかったんでしょうか…」

「いいの。カナには荒療治だけど、そうでもしなきゃ、あの子また

ずるずる引きずるから」

カナさんは、そんなにも未練を？ あの男に？

「あのー…元カレさんとどんないきさつがあつたのか、聞いてもいいですか？」

「元カレじゃないですよ。あんなのつきあつてたうちに入らないもの」

えっ…！ だつて。だつてカナさんは。

「どういうことですか？」

ユウコさんは、会話が人の耳に入らない場所に移り、こんな話をしてくれた。

カナはね、大学生のときから村上が好きだったの。もうずっと片思い。あいつは色んな彼女とくっついたり離れたりしてたから、諦めるのも告白するのもタイミングを逃しちゃったんだろうね。

けど何年か前から、うちの同級生の子…アヤっていうんだけど、村上はアヤとつきあうようになって。けっこく長く続いたもんだから、あれはもう結婚するだろうねって仲間内で話してたの。カナ

もさすがに「諦めなきゃね」って言ってた。

それが、今年の春ぐらいかな。村上とアヤがどうやらケンカして距離を置いたらしいのね。ここから先は口止めされてるから、わたしとさっきの子しか知らないんだけど。で、そのときに村上がカナを誘ってさ、そのまま寝ちゃったんだよね。カナにしてみたら、ずっと好きだった相手なわけだから拒んだりなんてできないでしょ？それで、村上も味をしめてしばらくカナの家に通ってたみたい。

カナは、さ。そういうふうに関係を持つって、好きじゃなきゃできないって考えるタイプだから、村上に想いが通じたんだと思っちゃったんだよね。村上は別に、カナのことが好きだともつきあおうとも言ってないし、そもそもアヤと別れたとも言ってないのね。

カナは、アヤに申し訳ないって最初は悩んだみただけど、自分もずっと好きだったわけだから、やっぱりうれしいって。それを認めることにするよって、言ってたんだけどね。何のことはない、村上はアヤとヨリを戻して、カナには「やっぱり友だちに帰ろう」のひとことで終わり。

「…なんスか、それ」

「ひどい話でしょ。端から見れば、彼女とのケンカ中にちょっと手出ただけってわかるんだけど、カナは本気にしちゃったからさ。別れた理由もわからないし、よっぽど自分に非があったんじゃないかって落ち込んでさ」

「そんなの、カナさんひとつも悪くないじゃないですか!」

「ありがと。けどさ、アヤとはどうなってるの？どういつつもりでわたしのところに来るの？って、聞けなかったカナも、やっぱりよくなかったよね…」

「そんな…」

「カナったらさ、うかれてぺらぺらしゃべっちゃったけど、アヤに知られたくないから村上くんとのことは内緒にして、なんて言うの。だから二人が寝たことは、わたしとさっきの子しか知らないんだ」

お兄さんも知らないことにしてね、と笑うユウコさんに、俺は笑みを返すことができない。なんだよ、それ。彼氏にふられて傷ついてんならわかる。なんだよ、遊び相手にされたのに気づかないで、相手の気まぐれを自分の非だと思ってるって。そんな理由で怖がってるのかよ。

「村上もねー…友だちだって言うなら、カナがそういうタイプの女じゃないってわかってもいいのにね」

そうだよ。そんなの俺だってわかるつつうの。

「カナも、早く村上を忘れるくらい誰かを好きになってくれるといいんだけどね」

「俺、立候補しますよ？」

もちろん冗談めかして、けれど本気で言う。しかしユウコさんは、笑顔で首を振って。

「ありがとう。お兄さんみたいな人にカナを大事にしてあげてほしいんだけどね。お兄さんではダメだと思う」

「…どうしてです？」

ユウコさんの答えは、バツサリと俺を切った。

だってお兄さん、村上と感じが似てるんだもの。

自分でも意外なほどに打ちのめされた。そのあとの仕事でも、カナさんの家に向かう道でも、ユウコさんの言葉が頭の中でぐるぐる回る。

似て、ますか、俺。

薄暗いところで見てるからかな。顔立ちが、学生の頃の村上に少しね。だからカナも、初対面のお兄さんに声かけられても警戒しなかったでしょう？

それは、俺たちが、もともと知り合いだったからで……あ。

初めて俺が声をかけた夜、警戒もせず「恋人になって」なんて言ってきたカナさん。あれは、俺が、村上って男に似てたから……？

カナさん、カナさん。俺、あいつのかわりだったの？

ドアを開けてくれたカナさんは、少し赤い目をしていて。泣いたあとだっけことに気づいた俺は、カッとして　その夜のモヤモヤを彼女にぶつけてしまった。

俺が怒る筋合いなんて、少しもないのに。

ほんとうに心底イヤになった。

あんな、人をバカにした態度をとるあの男に、それでも誘われて喜んでしまう自分が。せっかくソウタくんが助けてくれたのに、ジャマしないでとか思ってしまった自分が。

どうして抜け出せないんだろう。いや、わかってんだ、ほんととは。体が反応してしまうのは、単なる習慣。心が拒否するのは、認めたくないからっただけ。20代をまるまるかけた片思いの相手を、あんなに好きだったあの人を、こんなにも簡単に好きじゃなくなれるってことを。

これから誰かに恋をしても、きっとまた変わってしまうんだ、って、自分の心が信じられなくなるのが怖いから、村上くんのことをまだ好きだと思い込もうとしてるんだ。

ばかみたい。そこにしがみつく意味なんてないのに。けどやっぱり、あの人に手を差し伸べられたらきつと拒めない。

ソウタくん。ソウタくんはどう思っただろう。ユウコが彼に頼んであんなこと言わせたって言ってたけど。どこまで聞いただろう。どう思っただろう。わたしのこと、どう思っただろう。

「もうほんとバカ……」

村上くんを好きじゃなくなることを拒否する一方で、ソウタくんに嫌われたくないという気持ちがあることに気付いたら、自己嫌悪で泣けてきた。

ソウタくんが帰ってきたら、どんな顔して迎えたらいんだろう。とりあえず、赤い目はなんとかしないと……そこまで考えたところで、インターフォンが鳴った。

〓 〓 〓 〓 〓

「っ…痛い」

ドアを開けると、ソウタくんはわたしの顔を見るなり、表情に怒りを滲ませた。左手首をギリリとひねり上げられる。そのまま部屋へ引っ張って行かれた。

「痛いよ、ねえ」

「泣いてたんだ」

「え？」

「そうだよなあ！　せっかくヨリが戻るかもしれないのに、期間限定の男にジャマされて悔しいよなあ！」

「そんなこと、」

「俺のことなんて気にしないでさ、あいつんとこ行ってきなよ。それで抱かれてくればいいだろ」

「何言つて……」

「けどなあ！　賭けてもいい。ヨリなんか戻らないぜ。都合よく使われて終わりだ」

「……っ」

「俺、あいつに似てる？」

「え……？」

「あいつに似てるから、あいつの変わりに、俺に好きになってなんて言っただのかよ！」

「ちが……」

なんなの。全然わたしの話を聞いてくれない。

「俺もうムリだ。降りていい？ ああ、契約書には規定なかったなあ。違約金でも取る？」

「それは、日割りで、」

「…っ冷静かよ！　っざけんな」

なんなの。なんなのなんなの！　全然話聞いてくれないで、怒ってるばかりで。謝ろうと思ってたのに。勝手に怒って！！

つかまれていた手を力任せに振り払った。

「わたしだって！」

叫んだら、ソウタくんがあ然とした。そりゃそうだ。わたしがいちばん驚いている。こんな大声を出したのは子どものときの兄弟ゲンカ以来だ。

「…っ、わたしだって、わかってんだよ」

どこを見ていいかわからなくて、目を泳がせる。

「もう大丈夫だと思ったんだもん」

そう、そうだ。

「ソウタくんが来てから夜だって眠れるようになったし。ごはんもまともに食べられるようになったし。ムリヤリ残業しなくなったって、夜家に帰るのが怖くなくなったし。ソウタくんが来てから、もう大丈夫だっと思ってたんだよ」

息継ぎだけしてさらに続ける。もうジヤマされないように、最後まで言えるように。ああけど、何を言いたいのか自分でもよくわからない。

「平気だっと思ったのに、あの人の顔見たら、もう体が、それでもいって、体だけでも求めてもらえるならって思っちゃって」

わかってる。自分でもバカだっただけわかってる。

「体だけでも…？」

ソウタくんがつぶやき、わたしは顔を上げた。視線がぶつかる。感情が高ぶって、わたしはもう泣くのを止められない。

「ここに、心も体も求めてるやつがいるのに？」

「……！」

手の甲で涙を拭いながら、ふるふると首をふる。その手を、再びつかまれた。今度は優しく。

「やっぱり、あいつのどこへ行く……？」

ブンブンと強く首をふる。

「行かない……」

「どうして？」

「ソウタくんの、言う通りだと思うから。やっぱり、好きだった人がそんな男だなんて、思いたくないし」

「あいつのためってこと？」

みたび首をふる。

「自分のため、だよ。だって悔しいじゃない。そんなやつを好きだったなんて。それも、何年も」

「…過去形？」

どう、伝えたら、伝わるだろうか。ぐちゃぐちゃにこんがらがったこの頭の中を。

「ほんとともう、あの人に未練はないの。未練があるのは、自分の時間。あの人を好きだった時間がなんだったんだろうって思ってた。ああ、けど理由はそれだけじゃなくて」

手に触れた言葉を、整理もせずにそのまま口から出していく。ソウタくんは黙って聞いてくれる。

「んー…村上くんをもう好きじゃないってことを認めちゃうと、次の恋ができなくなるんだよ」

ソウタくんが首をひねった。

「…ごめん、今のわかんなかった。もっかい」

ええ？ そうだなあー。わたしも首を傾げながら答える。

「えーと、だから、村上くんのことをもう好きじゃない、ってことは、10年も好きだった人のことをカントンに好きじゃなくなれるってことで」

そこでちらりとソウタくんをうかがう。とりあえず最後までどうぞと手で促されたので、続ける。

「そうになると、これから好きな人ができてもまた変わっちゃうってことで。今のソウタくんへの気持ちも変わっちゃうってことで。それはやだなあって思ってた」

ん？ 何言ってたんだろう、わたし。さらに首を傾げてしまう。けれどソウタくんはこんなことを言った。

「その論理はやっぱりよくわかんないけどさ、一個だけ確認させてくれる？」

「なに？」

「要するに俺のこと好きなんだろう？」

…な、え？ そ、えええ？

けど。動揺の陰で、何かがストンと落ちた気がした。

要するに俺のこと好きなんだろ？

泣き止んだばかりのまだ濡れた瞳を、まんまるに見開いて呆然とする。カナさんはヤバいくらいにかわかった。あーキスしてえー。いや、まだだ。こらえろ、俺。まずはカナさんのぐちゃぐちゃの頭を解説してやることにする。

「カナさんは俺を好きなの。でもいつか心変わりするのが怖い。変わりがたくないって思う。つまりずっと俺を好きでいたい。要するにカナさんは俺が好きってこと。わかった？」

「……はい。って、そんな簡単なことでいいの？」

「他に何が必要？ そりゃあずっと好きだった人をふっきろうとしたら少しくらいさみしくなって当然さ。けど、それと俺を好きなこととは別物でしょ？」

「べ、別？ 別なの？」

「そうだよ。なに？ カナさんの胸は常に定員1人？」

え、普通ちがうの？ なんて目を丸くしてる。いやいや。必ずしもそうではないでしょう。少し考え込むようなそぶりをみせたカナさ

んの思考回路は、こんなことを聞いてきた。

「ソウタくんち、今何人？」

そう来たか。まあそれもそうか。

「俺？ 今はカナさんだけだけど？」

「ふー…ん…彼女の的なアレは…？」

「さすがに彼女いたら、金もらって恋人になるとかしないでしょ。そこまで人非人じゃないよ俺」

呆れて返すと、そりやそうか、と納得した様子。ああ、けど。俺は思い直して言い足した。

「ちゃんと言ってなかったね。彼女がいるかどうかって」

「や、いいよ、別にそんな話」

「何言ってるの。カナさんの失敗の原因でしょうが」

うぐ…という声なき声がする。

「彼女はいません。片思いとかも別にないです。女の子とは、正直ひと晩だけのつきあいも何回かしたことあるけど。ここ何か月かはしてないな。だから今はホントにカナさんしかないよ」

ひとつひとつ、告げていく。それはカナさんに必要だったはずのもの。そんなとこまで知らなくても……とボヤきながらも、同じようにカナさんも返してくれる。

「……つきあったのは、ソウタくんで二人目。カラダの関係は、三人目、です」

「……」

それを聞いて、俺はこれ以上ないくらい複雑な顔をしたと思う。村上とかいうあの男のほかにもいたのか、とか、妙にリアルな人数つて逆に嫉妬心を煽られるなあとか。けれど「カラダの関係はソウタくんで三人目」というさりげない台詞が、それを上回る感情を波立たせる。今、俺を人数に入れた？ ヤバいよ、それ。止められないよ、もう。

そういえば、カナさんの細い手首をつかんだままだった。途端に熱が上がる。

「カナさん？」

「ん…?」

「さっき言ったことだけど。契約をやめたいって話」

あれ、本気だよ。俺もう、金とか関係なくカナさんが好きだよ。カナさんと本当の恋人関係になりたいよ。

……そう、言うつもりだった。けど言えなかった。カナさんの目が、戸惑うように泳ぐから。

「…ごめん、あれウソ。忘れて。俺まだ、カナさんと一緒にいたい」

明らかにホッとした表情に、胸がちくりと痛む。カナさん、カナさんは俺とどうなりたい？ 約束の期限が来ても、俺の恋人でいたいと思ってくれる？

それが聞けなくて。せめて自分の思いをぶつけるだけ。

「カナさん」

「ん？」

「好きだよ」

「ありがとう」

「…俺、本気だよ?」

「わたしも、本気だよ」

カナさんはきつと、信じていない。俺の“本気”を、きつと期間限定だと思ってる。掴んでいた腕をぐつと引き寄せて、彼女を抱きしめた。

「カナさんの言葉って、どこまで本当?」

「ぜんぶ本当だよ」

「…8月31日までは、でしょ? カナさんは、「大丈夫だよ」と言う。」

「31日までは、わたしの言うことはぜんぶ本当。…9月になったらぜんぶ嘘になるから。大丈夫だよ」

「俺は、本気だって言ってるのに」

「だからわたしも本気だって」

伝えても伝えても、受け止めてもらえないもどかしさ。仕方がない。猶予はまだあと半月ある。夏休みもあるし、それまでになんとかそうだ、夏休みがあつたんだ。カナさんの肩を掴んで身を離し、目を覗き込む。

「夏休みの旅行、決めよっか」

「……うん！」

ああ、やっぱり。その笑顔があればそれでいいや、なんて甘くもへタレな気分になってしまう。だってその笑顔、見ていると俺までふわふわしてしまうんだ。そしてその“ふわふわ”は、俺を幸せな気分にするのだから。

|| || || ||

次の日、バイトに行くと、カウンターに腕時計が置かれていた。客の忘れ物だという。店長から「アルバイト全員に共有しといて」とメモを渡される。開店前のミーティングを仕切るのは、バイト歴のいちばん長い俺なのだ。

「あ、それからこれ」

「なんです？」

店長が差し出した紙を見ると、「正社員登用試験」の文字。

「これ…！」

「本部から、各支店で有望なやつがいたら推薦するように言われたんだ。もちろん推薦するだけで、採用されるかどうかは本人次第だが。まあ考えてみてくれ」

というか、しっかり考えてから返事をしろよ？　そう言いおいて、店長は開店の準備に戻っていく。

「ソウタさん、そろそろ時間スけど」

後輩に呼ばれて慌てて紙をポケットにしまい、ミーティングに向かった。

「あと今日は一点共有があります。昨日の貸し切りのお客様の忘れ物の腕時計を預かってます。今日取りにいらっしゃるそうなので、見えたら俺に通してください」

ハイ、と、俺の次にバイト歴の長い男が手を挙げる。

「念のため、その方のお名前わかりますか？」

「あー…っと」

そういうところによく気がつくやつなのだ。店長に渡されたメモを読み返す。しかし汚え字…

「あつた。お客様のお名前は、村上様だ」

ムラカミ？

その日はしばらく心ここにあらずだった。もちろん、心が多少留守でも失礼のない接客ができるくらいには、この仕事に慣れているという自負はある。いつだ？　いつ来る？

そして、やっと仕事に集中し始めた頃。

「ソウタさん、忘れ物を取りに村上様がお見えです」

「……はい」

俺は緊張を隠せない面持ちで、村上の元へ向かう。恋敵の元へ。

「お待たせいたしました、村上様」

「きみは、原田の…」

「昨日はありがとうございました。お忘れ物の時計ですが、念のためメーカーと色をおっしゃっていただけますか？」

忘れ物が高級品の場合、間違いなく本人に渡すために、こうしてメーカーや形状を確認することになっている。それは、店として大切に預かっていますよ、というアピールでもある。村上が挙げた名前に間違いなことを確認し、時計を渡した。

「こちらでお間違いございませんね？」

「ああ…ありがとう。きみは、原田と一緒にいた子だね」

原田、というのはカナさんのことだろう。

「昨日はお話中にじゃましてすみませんでした」

「いや…原田に彼氏がいたとはね。知らなかった」

「…俺、彼氏じゃないっスよ」

え？ と、村上が驚いている。うれしそうなのがバレバレだったの。調子に乗んなよ？

「俺、まだカナさん口説いてるところなんです。なかなかガード固くて。…村上さん、カナさんとはどんな別れ方だったんです？ 俺が付け入る隙ってありますかね？」

わざと明るく問うて警戒心をほどこせると、村上はこんなことを言ってきた。

「原田は難しいと思うよ」

「…どうしてです？」

「誘えば拒まない。友だちに帰ろうと言えばあっさり引く。正直、何考えてんのか最後までわからなかったよ。あいつからは会いたくとも言わないし、誘ってもこないし、壁があるっていうのかな…真綿を抱いてるようだった」

真綿のように、目の前にあるこの手が、指が、カナさんを抱いた。それは考えないことにする。

「だからきみも、あいつは難しいと思う」

「それを聞いて安心しました」

「えっ？」

挑むようにニヤリとしてみせる。

「友だちづきあい”長いつて聞きましたけど。俺のほうがカナさんのことわかってるみたいだから」

「なに？」

「今頃気づいてももう手遅れだから、シヤクだけ教えてあげますよ。カナさんが会いたいつて言わないのは、断られるのが怖いから。友だちに帰ろうつて言われて引き止めないのは、カナさんのことだから多分、別れたくないって駄々こねて嫌われるくらいなら、物分りよくしてせめて友だちの肩書きを守ろうとか考えたんじゃないかな」

「それは、つまり」

「つまり、それだけあなたを好きだったってこと」

そう。夜も眠れなくなるくらいに。ご飯も食べられなくなるほどに。

「そうだったのか…」

「過去形、ですよ？」

「……っ」

「カナさん、俺には会いたいつて言ってくるし、いろいろねだつてもくるし。少なくともあなたというより幸せに感じてもらえる自信はあるんで、もうカナさんにチョッカイ出さないでくださいね？」

「なっ……」

言葉を無くしている村上を、営業用スマイルで見送る。

カナさん、聞いて。俺この人に負ける気しねえ。早く俺のところへ来なよ。もう、傷つかなくていいから。

夏休みを取った。土曜日から水曜日までの5連休。ソウタくんとの旅行は、多少なりとも混雑を避けて月火の一泊にした。

ソウタくんは、バイトのシフトが決まっちゃったあとだったらしく、2日間の休みをもぎ取るためにいろんな人とシフトチェンジをして、前日までびっしり働いていた。今までみんなの尻拭ってやってたから、交渉はカンタンだったよ、なんて笑いながら。

ソウタくんのいない土日の2日間を、わたしはぐったりと寝込んで過ごした。旅行には支障がないと思ったから、ソウタくんには言わなかったのだけど。こんなことなら言ってしまうばよかった。さらに。ああもう、伝えるタイミングがつかめない。

ソウタくんが運転するレンタカーの助手席で、わたしは朝からずっと悶えていた。何につて。つまり、そのー…何のことはない、生理中なのであります。わたしの場合、辛いのははじめの2日程度だけなので、この旅行にはほんとに何の支障もないのだけ。

もし。もしも、だよ？ 今夜そういう雰囲気になったとしてだよ？ 寸前にそんな理由で断ったりしたら、わたしが関係を拒んでいると思ってしまうんじゃないかしら。かといって、会うなり告げても“それ”前提みたいで、勘違いすんなどか思われたらもういたたまれないし。

「カナさん」

そう。彼に抱きしめられてから、わたしはもともと、その温もりが欲しくなってしまったのだ。キスしたい。抱かれない。わたしにだって性欲はある。それに何より、もしもこの先一生男ができなかったらあの人が最後ってことになってしまう！ やだ！ ぜったいやだ！！

…けど、ソウタくんにそれを求めるのは悪いことかしら。それも含めての契約だって最初に言ってたし、そういうのできちゃいそうなタイプだとは思っけど。期間限定の恋人とカラダの関係って背徳の香り。何を今さら！ えーんだって良心が。良心？ 良心と性欲が闘ったらどっちが勝つのさ！ そ、それは当然…いやあるいはひよっとすると…。

「カナさん？ 酔った？」

「え、えっ？」

「なんか静かだから。平気？」

慌てて思考を振り払う。いかんいかん。

「ありがとう、大丈夫」

「カナさん、車酔いするほう？」

「車の種類と運転によるかな」

なにそのプレッシャー、とソウタくんが苦笑する。

「ソウタくんの運転は心地いいよ。性格が出るのかね」

「俺、乗り心地いい？」

「？ うん」

「エロ」

バツカじゃないの！？ほんとにバツカじゃないの？ 毒づきながらも、ちらりと横顔を盗み見る。免許を持っていないわたしは、車の運転ができる人をそれだけで尊敬してしまうのだけど。それが好きな人なら尚更だ。3割増くらいにカッコよく見えてしまう。

「さつきから俺見てる？」

ソウタくんが前を見たままわたしに聞いてくる。「カナさんは俺が好きなんだよ」と、わたしに教えてくれた彼。本気でわたしを好き

だと囁いてくれる彼。

「うん。運転する姿がカッコよくて、うっとりしてた」

「……俺、いまカナさんの命預かってんだからね？」

「うん？」

「そういう、ハンドルさばきを誤りかねないようなことを運転中に
言わないでください」

照れてらあ。ふふふ。じゃあ、車を停めてから言っね。わたしも好きだつて。彼に指摘されてみれば、ストンと腑に落ちる。そうだ、わたしはソウタくんが好きなんだ。カラダの触れ合いを求めるほどに。

けど大丈夫。勘違いはしないよ。自分で言い出したことはちゃんと守る。あなたが囁いてくれる愛も、「本気だよ」って言葉も、期限つきのもの。ちゃんとわきまえてる。ぜんぶ今月いっぱい

「あ」

「ん？」

「8月って、半分過ぎちゃったんだ……」

「……」

ソウタくんは黙ってわたしの頭を撫でてくれた。片手はハンドルに残したまま…ってそれカッコよすぎです。

「ソウタくん、ハンドルしっかり持ってた」

「え？」

「わたし、ほんとに今日ソウタくんを抱いてほしかった」

一瞬、車がぐらりと蛇行する。

「ちょ、カナさん！」

声が怒っている。でもごめん、言わせて。

「けどね、今日はできないの。ダメなの。それは、あのー…不可抗力、なんだけど、わたしが拒んでると思われたらヤだなって。そうじゃなくって、わたしはもうソウタくんを求めているんだってことを…どうやって伝えようかと…ずっと考えてた、の…何言ってるんだろうわたし」

尻すばみに声が小さくなっていく。どうかしてる。こんな話、困らせるだけだろうに。

「…1コずつ聞いてっていい？」

けれどソウタくんは、うなずいたわたしに落ち着いた声でこんなことを言った。

「それって、アレ…あの日ってことでしょ？」

「う、うん…」

「体調、だいじょうぶ？ 車しんどくない？」

…ソウタくん！ 真っ先の確認がわたしを気づかう言葉だなんて。

「ありがとう、大丈夫。しんどい時期はちょうど土日で終わったから、もう全然平気」

「よかった。無理しないでさ、休みたかったらすぐ言ってよ？ 急ぐ旅じゃないんだからさ」

「うん…」

どうしよう。ますます好きになっちゃうよ。ますます触れなくなっちゃうよ。

「で、ふたつ目」

「はい」

「なに、朝からずっと俺とのセックスのこと考えてたの？」

「そっ」

その言い方はちょっと語弊が！！ そりゃ間違ってはいないけどさあ。

「それで上の空だったんだ」

「上の空…だった？」

だった。と、断言されてしまう。くう…。こうなったら開き直つてやれ。

「大事なことだと思ったんだよ。わたしはつい、カラダの関係イコール愛情みたいに考えてしまうから」

「どういうこと？」

「体を求められて初めて、ああこの人わたしのこと好きなんだって安心できるというか。それがないと不安というか…だから反対に、体求められて断ったりしたら、わたしに気持ちが無いって思われちゃうのかなって…引いた？」

「出た、不幸思考」

不幸言うなっ！

「カナさん、それね。正解でも間違いでもない」

「どういうこと？」

今度はわたしが尋ねる。

「好きならそりゃあ抱きたいって思う。相手の体を求めるのは自然なことだよ？ けどね、別に好きじゃなくても、体だけ求めることだってできちゃうから。だから、カラダの関係を愛情の物差しにしても、正しくは測れないよ」

そう…そうだよな。けどじゃあ、どうやったら安心できるんだろう。

「カナさん、それって一般論必要？」

「え？」

「そんなのケースバイケースなんだしさ。俺がカナさんに対してどう考えてるのか。それがあればよくない？」

「たしかに…そうだ」

過去の経験を、なんでもかんでも教訓にしようとするクセがあるけれど。そんなの、毎回同じことが当てはまるわけじゃない。たしかに今必要なのは、ソウタくんがどう考えているか、だ。

「俺がカナさんを抱きたいって思うのも、それをガマンしてるのも、どっちもカナさんが好きだからだよ」

「…ソウタくん」

「なに？」

「運転中にする話じゃなかったね。ごめん」

え、なに急に、打ち切り？なんてソウタくんが困っている。違うの。

「部屋に着いてからすればよかった…」

「…どうして？」

だって。今すぐ抱きつきたい！ そんなわたしの欲情を無言から読み取ったのか、いや運転中でよかったよ、と彼は言った。

「これがホテルの部屋だったら、俺きつとガマンなんてできないもん」

「……………」

渋滞じゃなくてよかった。流れる景色で気を紛らすことができたから。頬の火照りを抑えて、当たり障りのない会話に戻すまでに、わたしたちは少しだけ時間を要したのだった。

いったい何の拷問かと思った。ハンドルを切り損ねることなく、無事にホテルまでたどり着いた俺をほめてやりたい。

楽しみにしていたはずのドライブ旅行なのに、朝からなんだかカナさんは上の空だった。車酔いでもしたかと聞けば、違うという。ひよつとして…以前、「カップルが一線を越えるのは旅行が定番」なんて言ってたから、それを思っただけ緊張してる？

そんなの。俺はカナさんが求めてくれるまで、いつまでだって待つつもりなんだから、心配ないよ？ …って、早めに伝えて安心させてあげたほうがいいかなあ。けど「そんなこと考えてないよ！」と引かれてもやだしな。

そんなことを考えていたところへの爆弾発言投下だった。

「わたし、ほんとに今日ソウタくんを抱いてほしかった」

…ちょ、カナさん！？ 何を言い出すの！

話を整理すれば、要するに。生理中だから今夜はできないけど、ほんとはもう俺に抱かれたいって思ってる、ってことで。ちょ、ほん

ともー何の拷問！ あのね、いつまでだって待つつもりだったよ？ けどそれが、心はオツケーです。あとは体の準備が整い次第です。なんてカウントダウンされたらさあ！ そのほうがガマンがつらいよ…。

「こんな話、部屋に着いてからすればよかった」

それって、今二人きりの空間に移動したって意味だよね？ 助手席のカナさんから、触りたい、触りたい、抱きたい、抱かれないという愁波がビシビシと飛んでくる。いつの間に、いつの間にそんなカナさん！

ほんと、無事にホテルまで到着した自分を今日はねぎらってやろう…。

〓 〓 〓 〓 〓

着いたのは、海岸沿いにある少し贅沢めのリゾートホテル。ふだんあまり金を使わない分、旅先ではケチらない！というのが信条のカナさんの、たつての希望だ。予算を気にしたくないから、と、はじめは俺の分も出すと言ってくれたけれど、断った。それくらい、ひねり出せば、なんとか。

滅多にお目にかからないフレンチを食べ、珍しくカナさんもアルコールを飲む。ほんのり赤く染まったカナさんを連れて砂浜を歩けば、

満天の星。砂に足をとられて歩きづらそうなカナさんが、俺の腕をつかむ。そのまますべらせて、手をつないだ。

だからどいつもこいつもよってたかって！　ゲルか。何の陰謀だ。俺に何させようってんだ！　花火をするグループや家族連れが多かったのが幸いだ。人気がなかったらヤバかった。

そんな、至福と苦行の境界線上を危なっかしく歩きながら、部屋に戻った。

「俺、風呂行ってくるけど。カナさんは……って、そっか」

「うん、部屋のを使うよ。ゆっくりしてきて」

湯上がりのカナさんが、部屋で待ってる。そんな姿はカナさんちで何度も見てるじゃんか。なんで俺こんなに興奮してんだろ。落ち着け、俺。風呂上がり、意味もなくロビーで新聞なんかを読んで時間をつぶし　そして気持ちを落ち着けて、部屋に戻る。ぱぱん、と頬を叩いてから部屋に入ると、カナさんはベッドの上で丸まって寝ていた。

一気に肩の力が抜ける。あのまま寝てしまったんだろう、カナさんの服装はさつきと変わっていない。その寝顔を見ながら、買ってきた缶ビールを飲む……ウマイ！

「いま何時…?」

カナさんがモソモソしだした。

「もうすぐ23時」

「そんなに寝ちゃったんだー…お風呂、入んなきゃ…」

言ったそばから静かになる。二度寝か！ 起こしてあげたほうがいいのか、寝かせておいてあげたほうがいいのか。うーんわからん。

「カナさーん？」

そっと呼びかけると、ムニヤムニヤ言いながら身を起こす。まだボーンとしているみたいだ。焦点もなんだか定まっていない。

「…明日の朝でもいいかなあ。もうめんどくさい…」

「風呂？ 別にいいんじゃないの。そんなフラフラで風呂場行かれても心配だし」

「んー…ダメだ…顔洗わなきゃ…化粧だけは落とさなきゃ…」

あれ？ 会話じゃなくて独り言だった？ カナさんはベッドにぺたりと座ったまま、ボケーツと起動中。俺はじわりとそばに寄っている。

「頭、覚ましてあげようか？」

至近距離で覗き込む。彼女の顔にそつと手を添えようとした瞬間、

「お風呂っ！ 入ってくる！」

俺の脇をすり抜けて、バタバタと風呂場に駆けこまれてしまった。早まった…。

そして小一時間後。ガチャリとドアの開く音がし、カナさんがこちらに声をかけて来た。

「ソウタくん？ 寝ちゃった…？」

ベッドに横たわり、腹の上で手を組んでいる俺。眠れる森の美女が白雪姫かつつこのポーズは明らかに寝たふりもいいとこだ。けれどカナさんは何も言わず、そつと明かりを小さくしてくれた。

しばらくガサガサとカナさんが荷物を片付ける音がしていたが、それが止むと、隣りのベッドがギシリと鳴った。

あー、ツインでよかった。それしか空いてなかったからだけど、心底、ダブルじゃなくてよかった。やれやれ、なんとか眠れるかな。なんてことを考えていたら、予想外の近さでカナさんの声がした。そして。

「ソウタくん…おやすみなさい」

「！」

唇に、ほんの一瞬やわらかな感触。離れていくそれを逃すまいと、とっさに彼女の後頭部に手をかける。目を開けると、驚き慌てるカナさんの顔。

「起きてたの…！？ あ、の、勝手なことして、ごめ……」

謝ってなんてほしくない。彼女の言葉を遮って、今度は俺からキスをする。深くはしない、触れるだけ。そのかわり、少し長めにゆっくり3つ数えて離す。彼女の瞳が揺れている。あー、もう一回。…うん、もうひと声。ヤバイ、止まんねえ。

結局、五回ほど唇を重ねたところで俺は初めて2人の体勢を思い出した。俺はベッドで寝ている。カナさんは、それを上から覗き込んでいる。てことは。慌てて半身を起こすと、カナさんはフローリングの床に膝立ちになっていた。

「ごめん！ カナさん、体勢キツくない？」

「膝が、ちよつと痛くなって来たかな」

ベッド上を後退し、スペースを作ると、どうぞどうぞと招く。カナさんは一瞬間を置いてから、「あ、じゃあ、おじゃまします」とベッドに上がってきた。

少しも待たずに抱きしめる。右手はカナさんの腰、左手はカナさんの後頭部。抱き枕のようにギュツと抱きしめた。あー、サイコー！
だけどサイアク！！

「俺今すつげえ迷ってたんだけど」

「…何？」

「このままガマンして寝るか、行けるところまで行っちゃってもつとツラくなるか」

俺の胸におでこを預けていたカナさんが、もそもそと動いて顔を上

げた。そして小悪魔のささやき。

「どっちみちガマンしなきゃいけないならさ。…やりたいこと、しようっ。」

カナさんの唇が、ぱくりと俺の下唇をくわえた。

……させるか！

大胆な行動に一瞬呆然とさせられたが、慌てて主導権を奪い返す。反対にカナさんの下唇をとらえ、丹念になめあげた。カナさんの手が、俺のシャツの胸元をくしゃりと掴む。吐息が、なまめかしく変わる。

これ以上進めばツラくなるのはわかっているのに、止められなかった。しばらく交わり合っていた唇と舌を離し、荒い息を整える。体はとつくに変化していた。どうやって鎮めよう、これ。

「…ふっ」

え？

「くっ…ふふ、あっははは！」

なにになになに！？

「なんか面白いことあった？」

突然笑い出したカナさんは心底おかしそうに、

「だって、体がツラくなるのわかってんのに止められないんだもん。わたしたちバカだなあって」

「…カナさんも、体、ツラいの？」

「ツライ、よ…」

ホントだ。バカだ、俺たち。体に火をつけたって消火する術はないのに。ただただくすぶる体を抱えて眠るしかないのに。けど止められなかったんだ。

「ホント、バカだな」

一緒になって笑い、彼女をギュッと抱きしめる。

「Mだね」

言いながら、カナさんが自分の足を俺の太ももに絡めてきた。

「…それはSだろ」

「甘えてるだけです」

なんてかわいいことを言っつて、おでこをすりすりしてくる。やっぱりSだ！

「ぎゃっ」

たまらなくなつて、カナさんを抱きしめたまま寝返りを打ち、仰向けになった。つまり、彼女は今、俺の上。

「お、重くない？」

「重みを感じたいの」

そ、そうなんだ、と言って彼女は俺の上でしばらくモジモジしていたけれど、やっぱり落ち着かないというので再びごろりと寝返りを

打った。もちろん、抱きしめたまま。すると彼女は、もそもそと動いて俺の首に腕を回した。相変わらず足も絡めてくる。

「抱き枕みたい」

「俺の抱き枕はやわらかくて気持ちいいけど？」

「わたしの抱き枕は、うーん……官能的でありながら安心感を与える2WAY機能です」

「ぷはっ」

じゃれあい、笑い転げる。こんなの初めてだ。だって、女とベッドにいてするコトなんて、ねえ？ 限られてるじゃないですか！ それが、ただくつついて笑い合ってるだけでこんなに楽しいなんて。

今日カナさんが生理でいてくれて本当によかった。でなければ今日は絶対シテしまっていた。けど、カナさん？ 俺決めたよ。カナさんと本当の恋人同士になれてから、カナさんを抱く。大切に、大切に。それまでは、これ以上しない。

「カナさん」

「ん？」

「すっげえ好き」

「わたしも……」

「わたしも、なに？」

「っ……すっげえ、好き」

抱きしめても抱きしめても足りない。力加減がわからないほど、好きで好きでたまらない。

昼間、カナさんは「8月が半分終わってしまった」とつぶやいていた。俺たちの“恋人契約”は、あと半月。それは俺にとっては少し意味が違っていて。

本心からの告白をカナさんにできる日。そこへ向かうカウントダウンなのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1826v/>

有料彼氏

2011年8月17日09時14分発行